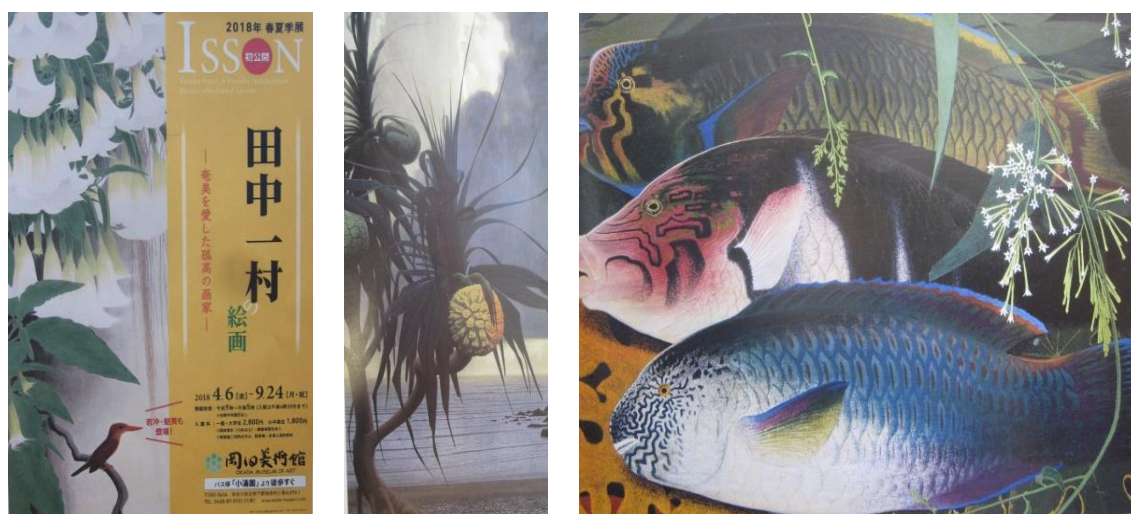


特別展 田中一村の絵画 —奄美を愛した孤高の画家—

岡田美術館（神奈川県・箱根町・小涌谷） 2018.04.06～09.24

「田中一村」（1908～1977）は、ほとんど独学で画業に専心した画家で、全く無名に等しかったが 1984 年にテレビの美術番組で取り上げられたのをきっかけにして、作品が多くの人々の心を捉えたため脚光を浴びてブームとなった。

本展は画伯の生誕 110 周年を記念して、50 歳で単身移住した「奄美大島」でこれまで日本画の題材となることのなかった「亜熱帯の生き物」を写し描いて、独自の画境の制作活動を行った当館所蔵「5点の作品」が初公開されている。



《白花ダチュラと赤翡翠（アカショウビン）》（左図）絹本墨画着色 1967年

画伯が滞在した園庭の大きな白花の群集「ダチュラ」に、背景には糸が流れるような線の「緑のカジュマルの根」と「赤ショウビン」（カワセミ）の色のコントラストが、実に美しく鮮明でリズム感が溢れる装飾性豊かな作品である。

《アダンの海辺》（中央図）、絹本 1972～73年頃 展示期間 08.24～09.24

「アダン」は一村が奄美の中で愛してやまなかった植物で、熟した果実を中央に左には未熟の2個を配置して、大きな緑色の葉は力強く天に向かって伸びている。

背景の大きな「暗雲」は、せまりくる嵐の前触れとされて「画伯の全精力が注がれ最高傑作と名高い作品」で、今回は期間限定で展示されている。

《熱帯魚三種》（右図）絹本 彩色 1973年

題材の熱帯魚は「アオブダイ」（上）、「シマタレクチベラ」（中）、「スジブダイ」（下）で、白花は「ヤコウボク」（ナイトジャスミン）を描いた作品である。

作品は何れも画伯が晩年の奄美大島在住時代に描いた希少なもので、日本画の画題にはこれまで無かった“亜熱帯の動植物の生き物”を題材として、濃密な色彩で描いたこれらの作品は画伯の真骨頂が見られることで注目される。